

これからの「民主主義」の話をしよう

——レイプハルトの議論を手掛かりに——

2011 年 7 月 7 日(木)

文責：上野 竜馬

- I.はじめに
- II.民主主義とは何か？
- III.レイプハルトによる民主主義の分類
- IV.多数決型民主主義のケース・スタディ
- V.コンセンサス型民主主義のケース・スタディ
- VI.まとめ
- VII.おわりに

I.はじめに

「デモクラシーは、一九世紀と二〇世紀の時代精神をほとんど普遍的に支配した流行語である。しかしまさしくその故に——あらゆる他の流行語と同じ運命をたどって——その確定的な意味を失ってしまう。」(ケルゼン 1966: 29)

現在、日本の政治制度は民主主義の上に構築されている。ところが、先の引用においてハンス・ケルゼンが指摘したように、我々は「民主主義とは何か」というラディカルな問いを突き付けられたとき、万人が納得しうるような明確な解答を提出することは非常に難しい。おそらく我々は、民主主義とは何かという点に関する理解を欠いたまま、漠然と民主主義はよいものであり、擁護すべきものであるという観念を持っているに違いない。

そこで今回は、アメリカの政治学者であるアーレンド・レイプハルトの民主主義論をベースとして、民主主義の本質を探るとともに、ケース・スタディを通じて望ましい民主主義の形態はいかなるものなのかを検討してみたい。

II.民主主義とは何か？

○民主主義を体現している制度として・・・

議会制度
平等選挙
政権交代
憲法

さまざまな制度が挙げられるが、すべてにおいて共通するのは、「民衆による自己統治」(杉田 2001: 15)という点である

III. レイプハルトによる民主主義の分類

i. 多数決型民主主義

○排他的、競争的、敵対的

Ex. イギリス、ニュージーランド、バルバドス etc.

→その特徴は { 単独過半数内閣への執行権の集中
内閣の優越
小選挙区制 . . . など

ポイント：特に重要なのが議会主権(parliamentary sovereignty)

議会主権とは . . .

「議会はどのような法律でも制定することができ、議会の意思の実現を阻むものは存在しない」(大山 2010: 118)ということ

ii. コンセンサス型民主主義

○包括的、交渉的、妥協的

Ex. スイス、ベルギー、EU etc.

→その特徴は { 連立内閣による執行権の共有
執行府と議会の勢力均衡
比例性の高い選挙制度 . . . など

ポイント：権力は共有・分散・抑制される

⇒世界的にはさまざまな民主主義の形態があるが、すべての民主主義は i と ii を両極に取る数直線の上に整理することができる

IV. 多数決型民主主義のケース・スタディ

i. 多数決型民主主義としてのポピュリズム

○ゲルナーとイオネスクによるポピュリズムの特徴

- ・人々の心理が原動力になっていること
- ・「独特のネガティヴィズム」をもつこと
- ・従属的な立場にある人を鼓舞すること
- ・自らよりも強力なイデオロギーや政治運動に吸収されること

⇒「我々」と「彼ら」の間に線引きし(排他的)、「彼ら」を敵とみなし(敵対的)、従属している人を鼓舞する(競争的)

○カノヴァンによるポピュリズムの類型

- ・ポピュリスト独裁(上からのポピュリズム)
- ・ポピュリスト・デモクラシー(下からのポピュリズム)

⇒特にポピュリスト独裁は多数決型デモクラシーの特徴を有している

ii.ポピュリズム独裁のケース・スタディ

～ケース：小泉純一郎～

○ポスト森を決める総裁選において・・・

- ・大方の予想は橋本龍太郎だったが、小泉が当選
→党員の支持、「自民党をぶっ潰す」というスローガン
- ・民衆が自民党を潰してほしいと考えていたと考えるのは不可解
→「自民党をぶっ潰す」という問題提起は小泉が行っていた

○2005年総選挙において・・・

- ・郵政民営化という特異な争点の提示
→国民の多くは郵政民営化を重大な争点だとはみなしていなかった
⇒問題提起を行ったのは小泉
- ・選挙後は議席数を背景に、郵政民営化法案は可決
→根底には多数決型民主主義の考え方

cf.橋下徹と河村たかし

V.コンセンサス型民主主義のケース・スタディ

i.コンセンサス型民主主義としての熟議民主主義

○熟議民主主義(deliberative democracy)とは

- ・「人々が対話や相互作用の中で見解、判断、選好を変化させていくことを重視する民主主義の考え方」(田村 2008: ii)
- ・「単なる多数決でものごとを決めるのではなく、相互の誠実な対話を通じて、異なる立場の人々の間に合理的な一致点を探っていこうというタイプの民主主義」(山田 2010: 28)

⇒多数決では吸い上げられない意見を尊重し(包括的)、他者との対話を重視し(交渉的)、自己の意見を変容させる(妥協的)

ii. 熟議民主主義のケース・スタディ

～討議制意見調査(Deliberative Poll: DP)～

○実施方法

- ・一定のテーマについて、ランダムサンプリングで参加者を選ぶ
- ・テーマに関する基礎調査を行う
- ・少人数で討議を行う
- ・最後に再び基礎調査と同一の質問を行う

○イギリスの DP

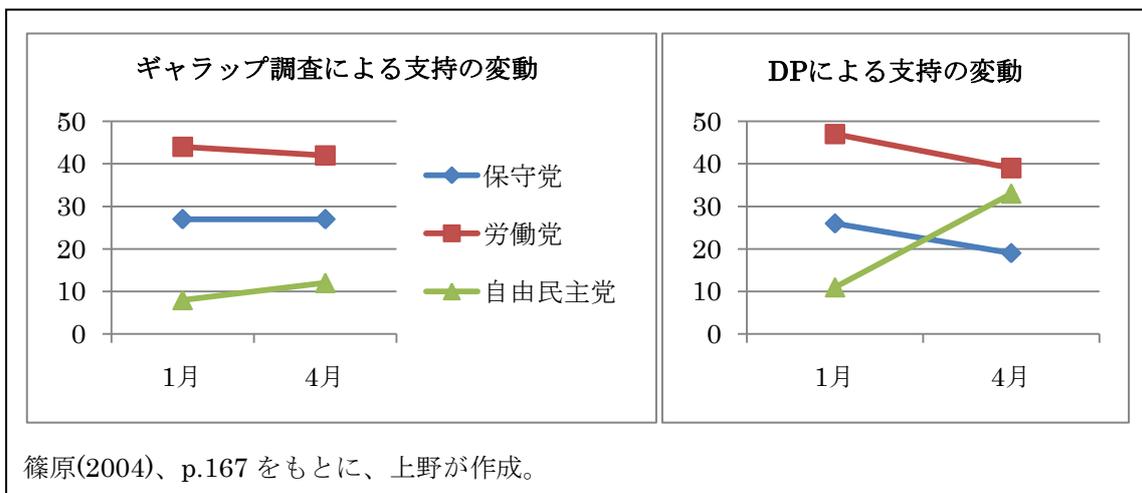
- ・テーマ：犯罪
- ・特に犯罪に関心の高い人だけが集まったわけではない
- ・公平な立場から資料を提供
→専門家や政治家(大臣やシャドー・キャビネットの大臣)らも参加
- ・これらを踏まえて討議
→その結果、「監獄のもつ効用について限界を感じずる人が多くなり、青少年の習慣についてもより消極的になり、逆に犯罪者の人権についてよりセンシブルになった」(篠原 2004: 164)

⇒討議により「対話や相互作用の中で見解、判断、選考を変化」(田村 2008a: ii)させたと言える

○選挙における熟議

- ・税金、EU、ユーロ加入の是非などの争点を少人数で討議
- ・市民の代表に加え、各政党の代表者も参加

⇒有権者の選好は変容



VI.まとめ

○メリット・デメリットの整理

多数決型		コンセンサス型
安い	コスト	高い
低い	大衆の意見の反映度	高い
リーダーシップ	重視するもの	代表性

※多数決型とコンセンサス型の間には、トレード・オフの関係が成り立つ

○論点

- ・ 熟議民主主義は国政においても適用しうるか？
- ・ 熟議民主主義は専門的な領域でも適用しうるか？
- ・ 望ましい民主主義の形態は、国政レベルと草の根レベルでは異なるだろうか？
- ・ 望ましい民主主義の形態はどのようなものか？

VII.おわりに

今回は、「民主主義」という政治学を学ぶ上で最も根底にある概念についての理解を深めることをねらいとして勉強会を構成してみた。この試みが成功したかどうかは参加者の判断に委ねたい。

しかし、かつてフランスの思想家であるジャン＝ジャック・ルソーが「自由な国家の市民として生まれ、しかも主権者の一員として、私の発言が公けの政治に、いかにわずかの力しかもちえないにせよ、投票権をもつということだけで、わたしは政治研究の義務を十分課せられるのである」(ルソー 1954: 14) と喝破したように、民主主義国家における政治を研究限り、「民主主義とは何か」「なぜ民主主義が必要なのか」などの問いと格闘する必要は必ず出てくるであろう。その意味でも、今回の勉強会で「民主主義」という抽象的なテーマで行った意義というものはあるだろうと自負している。

ともかく我々が「自由な国家の市民」である以上、望ましい民主主義の形態を検討することは必要になってくる。今日の議論の中で、各自の答えを見出していただければと思う。

【引用・参考文献】

石川真澄・山口二郎(2011)『戦後政治史 第三版』岩波新書。

伊藤光利・田中愛治・真淵勝(2000)『政治過程論』有斐閣アルマ。

上山信一(2010)『大阪維新 橋本改革が日本を変える』角川 SSC 新書。

大嶽秀夫(2003)『日本型ポピュリズム 政治への期待と幻滅』中公新書。

———(2006)『小泉純一郎 ポピュリズムの研究 その戦略と手法』東洋経済新報社。

大山礼子(2011)『日本の国会——審議する立法府へ』岩波新書。

- 川人貞史・吉野孝・平野浩・加藤淳子(2011)『現代の政党と選挙 新版』有斐閣アルマ。
 ケルゼン, ハンス/西島芳二訳(1966)『デモクラシーの本質と価値』岩波文庫。
 向山恭一(2010)「熟議/対話の限界…闘技民主主義の挑戦」田村哲樹編『語る 熟議/対話の政治学』(シリーズ政治の発見 5)風行社、pp.80-102。
 佐々木毅(2007)『民主主義という不思議な仕組み』ちくまプリマー新書。
 篠原一(2004)『市民の政治学—討議デモクラシーとは何か—』岩波新書。
 杉田敦(2001)『デモクラシーの論じ方—論争の政治』ちくま新書。
 建林正彦・曾我謙悟・待鳥聡史(2008)『比較政治制度論』有斐閣アルマ。
 田中信一郎(2010)「今こそ必要とされる熟議と合意の国会」『世界』2010年10月号、pp.81-91。
 田村哲樹(2008)『熟議の理由 民主主義の政治理論』勁草書房。
 ———(2010)「親密圏における熟議・対話の可能性」田村哲樹編『語る 熟議/対話の政治学』(シリーズ政治の発見 5)風行社、pp.47-79。
 早川誠(2006)「市民社会と新しいデモクラシー論 討議のために」川崎修・杉田敦編『現代政治理論』有斐閣アルマ。
 林和宏(2008)「第五共和国運動から社会主義革命へ:チャベス政権下ベネズエラにおける「参加型民主主義」の変容」『イベロアメリカ研究』第30巻第1号、pp.29-42。
 松谷満(2010)「ポピュリズムとしての橋下府政—府民は何を評価し、なぜ支持するのか—」『市政研究』第169号、pp.18-29。
 柳瀬昇(2010)「裁判所における素人と専門家との熟議・対話」田村哲樹編『語る 熟議/対話の政治学』(シリーズ政治の発見 5)風行社、pp.206-234。
 山口二郎(2010)『ポピュリズムへの反撃—現代民主主義復活の条件』角川 one テーマ 21。
 山田竜作(2010)「現代社会における熟議/対話の重要性」田村哲樹編『語る 熟議/対話の政治学』(シリーズ政治の発見 5)風行社、pp.17-46。
 吉田徹(2009)『二大政党制批判論 もうひとつのデモクラシーへ』光文社新書。
 ———(2011)『ポピュリズムを考える 民主主義への再入門』NHK ブックス。
 ルソー, ジャン=ジャック/桑原武夫・前川貞次郎訳(1954)『社会契約論』岩波文庫。
- Dahl, Robert A., 1998, *On Democracy*, New Haven & London: Yale University Press(中村孝文訳『デモクラシーとは何か』岩波書店、2001年)。
 Nye, Joseph S., Jr., Philip D. Zelikow, and David C. King, eds., 1997. *Why People Don't Trust Government*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press(嶋本恵美訳『なぜ政府は信頼されないのか』英治出版、2002年)。
 Lijphart, Arend, 1999, *Patterns of Democracy: Government Forms and Performance in Thirty-Six Countries*, New Haven: Yale University Press(粕谷裕子訳『民主主義対民主主義 多数決型とコンセンサス型の36ヶ国比較研究』勁草書房、2005年)。